

278. 伊勢遺跡(第40次調査)出土の 縄文時代晩期から弥生時代前期の 土器の資料報告

1. はじめに

伊勢遺跡の所在する伊勢町は、守山市南部に位置し、栗東町に接しており、標高96~99mのゆるやかな傾斜地上に立地している。

伊勢遺跡はこれまでの調査で、縄文時代後期から近世にかけての複合遺跡であることがわかっている。特に弥生時代後期には東西約700m×南北約450mの範囲に大型建物や竪穴住居が存在し、特異な性格を有する集落と考えられている。また、中世の集落も存在していることがわかっている。

第40次調査は区画整理地内において、平成9年4月24日~6月13日にかけて、共同住宅建築に伴う調査として実施したもので、調査面積は約320㎡である。ここから検出した自然流路は弥生時代後期の集落の南東を限る河川跡であると考えられており、第28次調査や平成4年度に行われた栗東町の調査においても、この自然流路と同一の遺構が検出されている^①。その時の調査では、弥生時代後期から中世までの遺物が出土しており、縄文時代晩期から弥生時代前期の土器は出土していない。

2. 第40次調査の概要

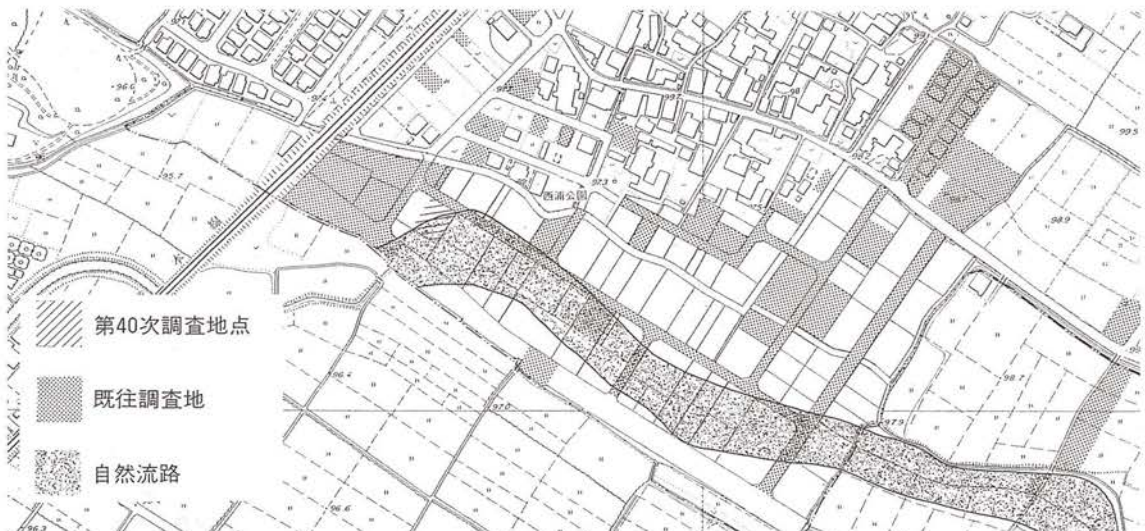
第40次調査で検出した遺構は、縄文晩期から古墳時代後期の土器を出土した自然流路の他に、北東から南西に向かって流れる幅約4.3m、深さ約50cmの溝1条(SD-1)があり、獣骨がまとめて出土し、遺物から13世紀頃と考えられる。さらに北から南に向かって流れる古墳時代の幅約1.2m、深さ約30cmの溝1条(SD-2)を検出した。SD-1は第29次調査でも検出され、獣骨が出土し、牛骨と判明している。

自然流路は、川幅約9.6m以上、深さ約1.4mを測り、北東から南西に向かって流れており、調査地は自然流路の屈曲部分にあたるものと考えられる。堆積土層は上から粘質土層、砂礫層、スクモ層に大別でき、粘質土層からは中世の遺物・須恵器が、砂礫層、スクモ層から縄文時代晩期、弥生時代前期・中期・後期の土器、須恵器などの遺物が混在して出土している。

今回は、この自然流路から出土した遺物のうち、縄文時代晩期から弥生時代前期の土器について報告したい。

3. 出土遺物

今回出土の資料は、そのほとんどが破片で全形をうかがえるものは少なく、そのうち70点を図示することができた。



第1図 調査位置図(S=1/5000)

1) 突帯文土器

突帯文土器は深鉢、浅鉢型土器が出土した。

a) 深鉢

口縁端部の突帯の位置と突帯の形状から次のように分けることができる。

A類……口縁端部よりやや下がって突帯を貼り付けるもの

B類……口縁端部に接して突帯を貼り付けるもの

C類……口縁端部に接するが、垂れ下がる突帯を貼り付けるもの

また、突帯に施される刻目文としては、D字・O字・V字のものと刻目が施されない無刻のものがある。

A類 (1～5)

(1)は間延びしたO字の刻目を持ち、断面三角形の突帯を貼り付けている。(2・3)は断面三角形の突帯を貼り付けている。(4)は口縁端部を丸く納め、断面円形の突帯を貼り付けている。(5)は断面円形の突帯を貼り付けている。

B類 (6～19)

(6)は突帯の部分が一部欠損しているため刻目の形態は不明であるが、断面円形の突帯を貼り付けている。(7)はD字の刻目をまばらにつけ、断面三角形の突帯を貼り付けている。体部はハケメで調整されている。(8)はD字の刻目を持ち、断面三角形の突帯を貼り付けている。(9～12)は間延びしたO字の刻目を持ち、断面三角形の突帯を貼り付けている。(11)は体部外面に炭化物が付着している。(13)は口縁端部は丸く納め、断面三角形の突帯を貼り付けている。(14)は口縁端部は内面にやや段を持ち、断面三角形の突帯を貼り付けている。(15)は口縁端部はやや面をもち、断面三角形の突帯を貼り付けている。(16・17)は口縁端部はやや面をもち、断面円形の突帯を貼り付けている。(18)は、断面三角形の突帯を貼り付けている。口径14.0cm、残存長2.8cmである。(19)口縁端部はやや丸く納め、断面三角形の突帯を貼り付けている。突帯下には指押痕が残る。

C類 (20～23)

(20)はV字の刻目をもち、断面下三角形突帯を貼り付けている。(21)は間延びしたO字の刻目を持ち、断面三角形の突帯を貼り付けている。突帯下に指押痕が残る。(22)はO字の刻目を持ち、断面下三角形の突帯を貼り付けている。(23)は断面下三角形の突帯を貼り付けている。

体部 (24～44)

次は体部についてであるが、刻目文は口縁部と同様にD字・O字・V字の刻目文が施されるもの(24～39)と無文のもの(40～44)がある。

(24)はまばらにD字の刻目を持ち、断面三角形の突帯を貼り付ける。(25・26)は小D字の刻目をもち、断面三角形の突帯を貼り付ける。(27)はD字の刻目を持ち、

断面三角形の突帯を貼り付ける。突帯の下に凹線を2条もつ。外面に炭化物が付着する。(28・29)はD字の刻目をもち、断面円形の突帯を貼り付けている。(30)はV字の刻目を持ち、断面円形の突帯を貼り付けている。

(31・32)はO字の刻目を持ち、断面円形の突帯を貼り付ける。(33・35)は小O字の刻み目を持ち、断面円形の突帯を貼り付ける。(36)はO字の刻目を持ち、断面円形の突帯を貼り付けている。(34・37)はV字の刻目を持ち、断面三角形の突帯を貼り付けている。(38)は間延びしたO字の刻目を持ち、断面円形の突帯を貼り付ける。突帯は条痕で調整されている。(39)は断面台形の突帯を貼り付ける。(40・43)は断面三角形の突帯を貼り付ける。(41)は断面円形の突帯を貼り付ける。(42)は刻目は不明であるが、断面台形の突帯を貼り付けている。(44)は断面円形の突帯を貼り付け、体部外面は縦方向にハケメ調整を施す。(45)は口縁部は丸く納め、口縁より下がったところに断面三角形の突帯を貼り付ける。

b) 浅鉢型土器

(46)は端部は丸く納める。外面はヘラミガキを、内面は横ナデを施す。(47)は口縁部を細く丸く納める。(48)は口縁端部は面を持ち、内面に張り出している。外面ともナデ調整を施している。(49)は口縁端部は面を持ち、外にやや張り出している。

2) 条痕文系土器

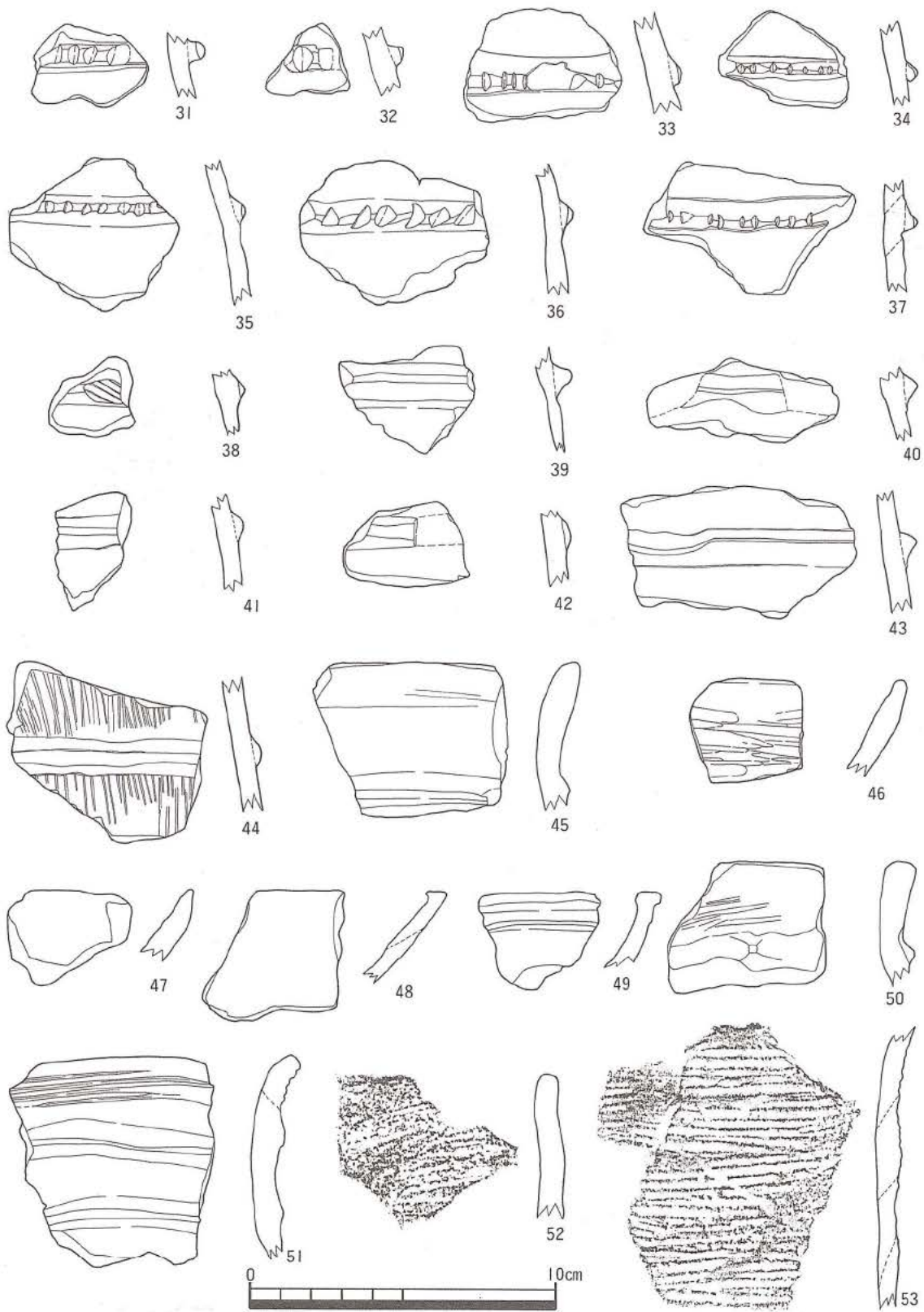
(50)は口縁端部を丸く納め、口縁部より下がったところに間延びしたO字の刻み目を持つ断面円形の突帯を貼り付ける。(51)は壺の口縁部と考えられる。口縁はやや外に開き、口縁端部をやや面取りし、口縁部に条痕が入る。口縁より下がったところに断面台形の2条の突帯を貼り付ける。(52)は鉢の口縁部である。口縁端部は丸く納め、体部は横方向の条痕を施す。(53)は深鉢の体部である。貝殻によると考えられる荒い条痕が横方向に施されている。(54)は口縁部は丸く納め、間延びしたO字の刻目を持つ断面円形の突帯を貼り付ける。(55・56)は間延びしたO字の刻目を持つ。(56)は断面三角形の突帯を貼り付ける。(57)は壺である。口縁部は外へ開き、横長に間延びしたO字の刻目を貼り付けている。突帯の下に条痕を施す。口径13.2cm、残存長3.6cmである。

3) 遠賀川式土器

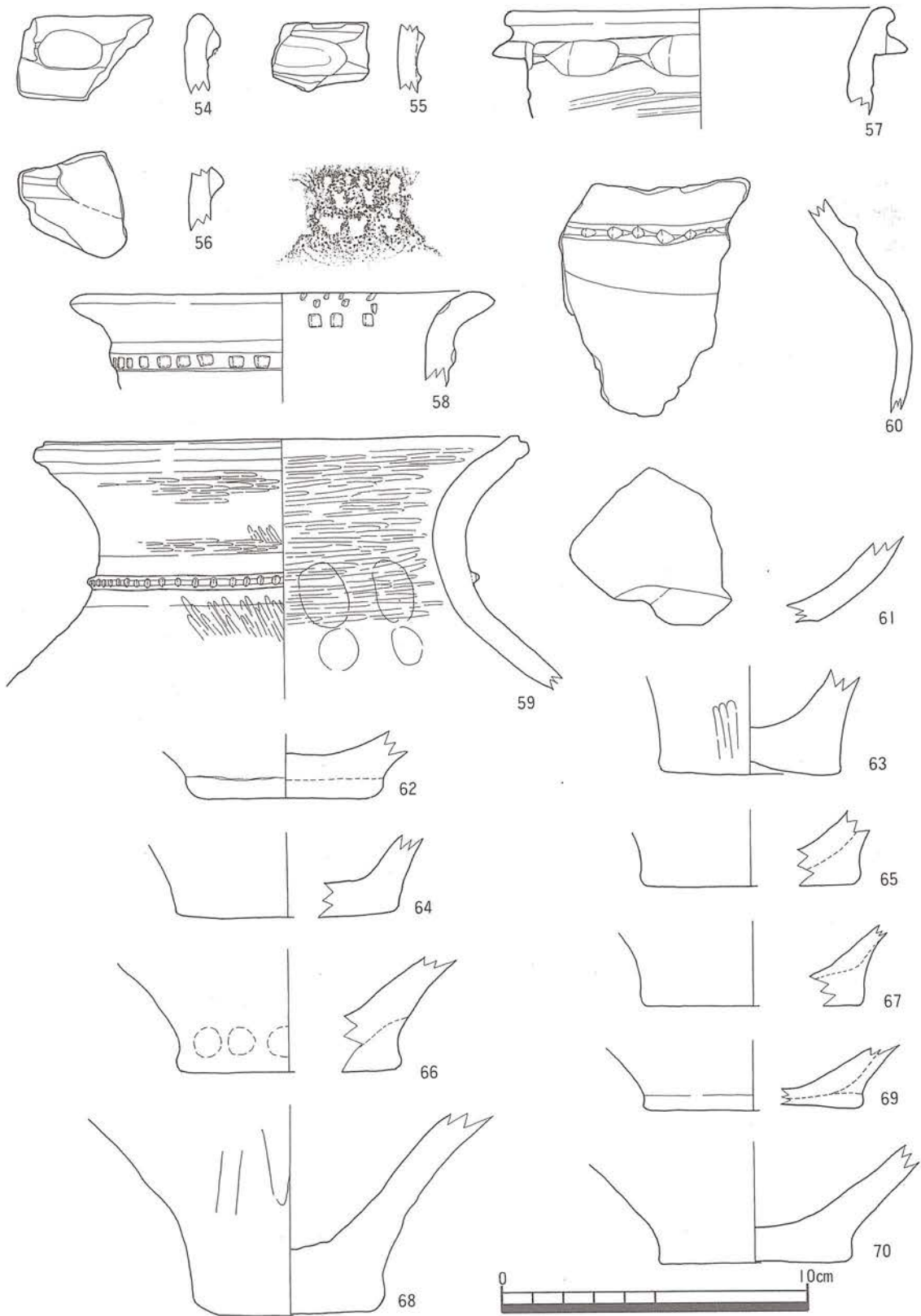
(58～60)は壺である。(58)は口縁部は丸く納め、頸部に四角の刻目を持つ断面円形の突帯を貼り付ける。内面にも四角の刻目を3段入れる。口径14.0cm、残存長3.5cmを測る。(59)は頸部に断面円形の突帯を貼り付け、小O字形の刻みがみられる。口縁端部に1段、段をつける。調整は内外面にミガキを施し、内面頸部にミガ



第2图 出土遗物



第3图 出土遺物



第4图 出土遺物

キの上から指押さえ痕がある。口径16.4cm、残存長8.5cmである。(60)は壺の体部である。小O字の刻目を持つ断面円形の突帯を貼り付ける。体部に若干の段を持つ。内面はナデ調整である。

4) 底部

(61)は外底面が中央に向かってやや窪んでいる。内面には朱の付着が認められ、分析結果から水銀朱と判明した^②。厚さ0.9cmを測る。遠賀川式土器の壺の底部であろうか。(62)は外面に貼り付け痕が残る。外底面は調整しておらず、内面はなで調整である。径6.8cm、厚さ1.5cmを測る。(63)は外面はミガキを、内面はナデ調整を施している。外底面は中央で窪んでいる。径7.2cm、厚さ1.3cmを測る。(64)は径7.4cm、厚さ1.2cmを測る。(65)径6.2cm、厚さ1.2cmを測る。(66)は外面に指押痕が残る。径7.4cm、厚さ1.9cmを測る。(67)は内外面ともナデ調整を施している。径7.2cm、厚さ1.0cmを測る。(68)は外面上部にけずりが入る。内面には炭化物が付着している。径6.4cm、厚さ2.2cmを測る。(69)は外面底部が中央に向かってやや窪んでいる。径7.2cm、厚さ0.5cmを測る。(70)は外底面は中央に向かってやや窪んでいる。径7.0cm、厚さ1.2cmを測る。(62～70)は突帯文土器の底部と考えられる。

4. まとめ

今回出土した土器は、前述したとおり縄文時代晩期にあたる突帯文土器、東海系の条痕文土器と、弥生時代前期の遠賀川式土器である。その出土の割合をみると、突帯文土器79%、条痕文土器14%、遠賀川式土器5%である。突帯文土器に比べると、条痕文土器・遠賀川式土器の出土比率は少ないといえる。

突帯文土器と遠賀川式土器の共伴がある時期まで認められているが、これらは自然流路からの出土であり、須恵器なども混在しているため、残念ながらそれらの確かな共伴関係を求めることはできない。しかし、今回出土した資料から次のことがいえる。

ひとつは条痕文土器が伊勢遺跡でも出土したことから東海との交流が伊勢遺跡にも及んでいたことがうかがえることである。その時期は、檀王から水神前期頃と考えられる。山賀遺跡・服部遺跡でもほぼ同時期のものが出土している。

もうひとつは、守山市内において弥生時代前期の遺跡が琵琶湖沿岸部だけでなく内陸部にも広がることである。守山市内で弥生時代前期の遺構・遺物が確認されている遺跡は、これまで服部遺跡、山賀遺跡、赤野井遺跡、寺中遺跡の4遺跡であって、琵琶湖沿岸部に集中していた。しかし、平成8年度に調査された中島遺跡^③・伊勢遺跡の両遺跡から、内陸部にも弥生時代前



第5図 守山市内の縄文晩期・弥生前期の遺跡

期の集落の存在を認めることができるようになった。伊勢遺跡から出土した遺物は、自然流路からのものであり、上流から流れてきて、自然流路が屈曲する当地点で溜まったものと思われる。このことから縄文時代晩期から弥生時代前期の集落が伊勢遺跡周辺及びその上流にも存在する可能性があるのではないだろうか。

今日の伊勢遺跡で出土した資料によって、守山市において内陸部に広がることがわかった。今後、草津市や栗東町も含めて、縄文時代晩期から弥生時代前期の遺跡がどのように広がるか検討が必要と思われる。

今回の報告にあたり、伊庭 功、林 大智、佐々木 勝 各氏にご教示、ご協力を得ました。文末ではありますが、記して心から感謝申し上げます。(中村ますみ)

註

- ① 佐伯英樹『伊勢遺跡』栗東町埋蔵文化財発掘調査1995年度年報 1996年
守山市埋蔵文化財センター『乙貞』第78号 14巻第5号 1995
- ② (財)滋賀県文化財保護協会の中川正人氏に分析していただいた。
- ③ 守山市埋蔵文化財センター『乙貞』第97号 17巻第6号 1998